



私の趣味 《1》

私の趣味

菅野聖逸 (菅野皮膚科：川崎市川崎区)

こんな私でも50年以上生きていとそれなりに何らかの趣味あるいはこだわるものがある。いずれもお金を出すことで観たり、聞いたり、食べたりできるもので、もちろん買ったり、プレーできるものである。これらは大して努力する必要がないという共通点がある。食についてならステーキだ。サーロインでもフィレでもやっぱり松阪牛のA5がいい。その焼き方、塩、コショウまでこだわり、結局、庭に耐火煉瓦を組んで鉄板焼ができるように作ってもらった。魚ならノドグロ、クエ、寒ブリがいい。でもなんととっても秋の丹波の松茸は最高だ。

またゴルフに関してはパターならベティナルディがいい。ゴルフ場なら500クラブ、我孫子ゴルフ倶楽部、相模原ゴルフクラブはホームコースということもあって、お気に入りだ。メンバーにはなれないが軽井沢ゴルフ倶楽部もすばらしい。ハワイであればオアフ島のワイアラエ、ハワイ島のフォーシーズンズのフアラライとケオルー (Ke'olu) がいまのところお気に入りだ。ハワイではゴルフ場の周辺の海や景色はもちろんすばらしいが、周りの別荘が実に豪華である。なんでも20億以上するものもあるとか。作家ならClive Kusslerがいい。洋書にしては読みやすく、主人公で海洋探検家であるDirk Pittが相棒のAl Giordinoと007並みの活躍をする。音楽についてはジョン・レノン、チャット・ベイカー、マイケル・ブーブレ、サイモン・ル・ボン (デュラン・デュランのボーカル)、バーブラ・ストライザンドの声がとにかく好きだ。

このようなこだわりにはなんら理屈、理由などない。単に自分が惹きつけられる何かがあるからだ。すべて自己満足にすぎないことかもしれない。でもこのようなこだわりは人生を確実に豊かで、すばらしいものにしてくれると信じて疑わない。

このようなこだわりのひとつに腕時計がある。今回は幾つかの私のお気に入りの時計について書いてみたい。ちなみに時計の購入のきっかけはそのほと

んどが衝動買いである。買うときはいつもこれを最後にしようと思っていた。相手が時計だから次から次へと浮気してもなんの問題も、事件も生じない。これが女性だったらいまごろ生きてはいないだろうと思う。

まずはRolex Oyster Perpetual Dateのゴールドとステンレスのコンビだ。これは大学院生のときに学会で立ち寄ったウィーンで購入したものだ。国内と比べて半値以下で購入できた。当時はこのタイプのRolexが人気であった。でもいまでは姪っ子の腕に収まっている。時計好きにはその金無垢は憧れの的だった。しばらくしてRolexのYacht-Masterのゴールド、ボーイズサイズを買った。これはスポーティであり、いまでもゴルフのときに愛用しているが、どんな場面にも適しており実にオールラウンドなものだ。自動巻きだが正確に時を刻む。次はIWCのTZCの自動巻きでシリアルナンバー48/500のプラチナ製である。重くてごっついだが、ほとんど毎日私の腕にある。文字盤とベルトが紺で、いわゆるごく普通の時計にしか見えない。扱っても厄介で24時間以上放って置くとすねて止まってしまう。でも腕にした感覚が実にいい。CartierではCollection Prive Lineのタンクアビスツウタイムゾーンというイエローゴールドで、ベルトは黒クロコのものがある。手巻きであるが品格があり、友人との食事会、お祝い事などのときによく使う。変わりものではVacheron Constantinの四角い小ぶりの手巻きがある。文字盤の上にホワイトゴールドでできた、窓のブラインドのような仕掛けがあり、サファイアのポッチを押すと隙間ができて文字盤が見えるようになる。つまりは両手を使わないと時間が確認できない。でもなかなか品がある。老舗のブランドのBlancpainは薄型ではあるが自動巻きで、プラチナ製だ。紺色の文字盤とクロコベルトで落ち着いた雰囲気の時計である。シリアルナンバーは17/50と世界50個限定である。

現在最も気に入っているものは日本製のグランドセイコーの9s67ムーブメント搭載のホワイトゴールドである。文字盤とクロコベルトがチョコレート色である。72時間パワーリザーブも付いていて使い勝手がとてもよくオールラウンドなものだ。シリアルナンバーは122/200である。夏のゴルフや海外でのゴルフプレーにと思って買ったものにVictorinox swiss armyがある。赤の文字盤でベルトも赤の強化ゴムであり、やはりごっついものだ。マリンスポーツに適していて、防水性が高い。

最後にTechnoMarineを紹介する。本体とベルト一体型でプラスチック製である。私には薄紫、家内にはホワイトの2個を購入した。自動巻きでも手巻きでもない、電池で動くものだ。Casioより上品なもので、家内が数ある中で、唯一腕につけてくれる時計である。軽いし気楽な時計だからという理由である。なにか自分だけの密かな楽しみで集めた時計をこのように誌面に曝け出すのはやっぱり抵抗があるものだ。最後に一言“もう時計を買うのはやめよう”。

私の趣味 《2》

Grand Masters Hockey London World Cup 2012を目標にして—ホッケーこそ私の人生の中心—

新井健男 (YOUヒフ科クリニック：横浜市港北区)

1965年19歳の医学部入学時に、やりたかったIce Hockey部がなく、カツ丼1杯で誘われて、仕方なく入部したField Hockeyに魅せられて、64歳の現在でも現役。Player歴45年になります。

大学卒業後、虎ノ門病院外科病棟医（研修医）としての3年間はさすがに研修一筋！その後、学生時代からの希望であった小児外科医としてのスタートを順天堂大学駿河敬次郎教授の下で開始した。この頃、病院近くの飲み屋のマスターに誘われて、1978年に結成されたFHMC Tokyo*という社会人チームに参加。小児外科医という極めて多忙な科で

の診療・学会活動と共に、生活の中心としてField Hockeyを楽しんでいた。FHMCでは選手兼監督として、活躍!! その後、皮膚科医にトラバユ。1990年に皮膚科で開業した。

2007年夏過ぎに、FHMC Tokyoの元Memberから、大阪での全日本Masters Hockey大会（50歳以上が資格）への助っ人参加を頼まれて、この大会の50歳以上クラスに参加した。大阪ではこの年9月17日（奇しくも私の誕生日）に、2008年9月に香港で開催されるGrand Masters Hockey World Cup（60歳以上）に向けて、JGMA（Japan Grand



Italy戦後に全員で。寝ているのが筆者



George at bar

Masters Hockey Association) が結成された。既に60歳を超えていた私は、これに参加することにより、Masters Hockeyという人生の新たな目標を見いだしたのです！

大阪での練習会・試合に月1～2回参加！ さすがに60歳以上のplayerは少なく、最終的に香港Happy Valleyで開催されたWorld Cup 2008に日本代表として参加することが出来た。極めて蒸し暑い香港の9月に、10日間でフルゲーム6試合というハードな日程であったが、怪我もなく大会を経験することが出来た。

優勝したドイツは数多くのクラブ・選手から選抜されたチームであるのに対して、日本は数少ない選手の集まりのチームで結果は自明のぼろ負けの全敗！ 世界の厚い壁を知らされた大会であった。

ドイツ、オーストラリア、イギリスなどの上位チームのプレーヤーは体力・技術共に洗練され、60歳クラス、65歳クラスの選手でさえ、40、50歳代のPlayerと同様の体力を示していた。この大会の最高齢選手はScotlandの88歳の選手でちゃんと走り、シュートさえしていた。彼が出場すると、観客はアイドルの如くに名前(George)を連呼して、大騒ぎで応援していた！ この選手が私の憧れの目標になったのは当然であります！

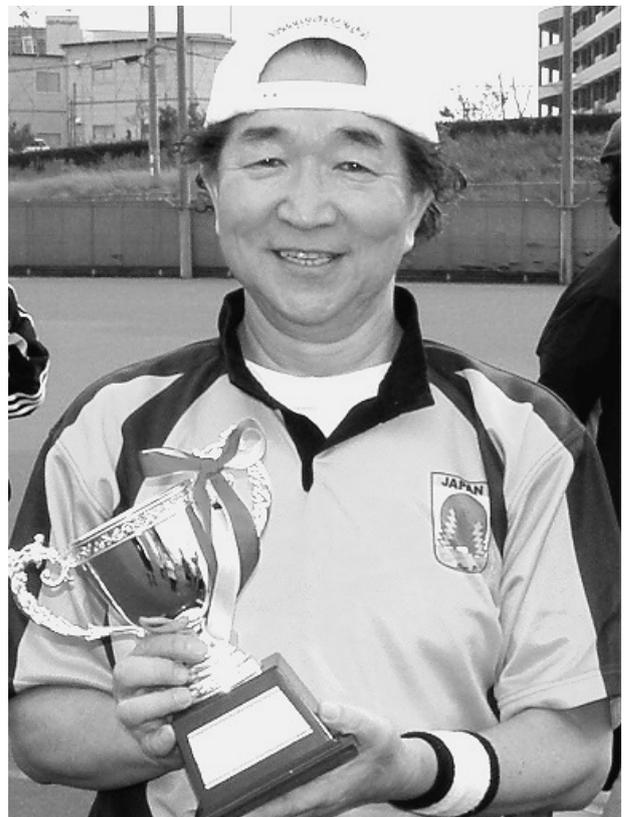
Field Hockey Playerとしては、体の小さい私ですが、学生時代から常にフォワードのトップ3のポイントゲッターのpositionのみプレイしていた。最初の助っ人参加の大会でも、2得点出来るなど、不思議に節目の試合には得点出来た。その後大阪でのリーグ戦でも、それなりにフォワードとしての得点責任は成果を上げています。

大学時代に始めた頃のField Hockeyは土のグラウンドでしたが、公式試合はだんだん天然芝グラウンドとなり、現在では公式試合は全て人工芝で行われています。土、芝のグラウンドではボールがバウンドするのに対して、人工芝では不規則なボールの動きがなくなり、地を這うような速いボールの動きに変わり、ボールの止め方、ヒットの仕方も全く変わっています。

体に染みついた古いプレイスタイルのSenior Playerには、若いプレーヤーがいても簡単に出来る人工芝向きのBall Stop、パスなどがなかなか出来ないのです。練習の時に人工芝向きの練習をしても、



全日本Masters Hockey大会



2009.11.15 第1回日本Grand Masters ホッケー大会で優勝

いざ試合となると、体が覚えている古いスタイルのPlayが出てしまうのです。それでも、診療のない土日に、大阪の人工芝グラウンドに月1、2回練習に通っています。4月からは東京での関東社会人リーグや地域リーグが始まりますので、忙しくも心躍る日がやってきます。

大阪の舞洲 (USJ: Universal Studio Japan) の少

し先) というところで、平均年齢60 + α 歳、最高令73歳のホッケー好きが集まって、2年後のLondon World Cupを目指して、練習を続けています。

頑張ったご褒美にか。。。昨年の9月に行われた全日本Masters Hockey大会(50歳以上)の+60部門と11月に行われた第1回日本Grand Masters Hockey大会(60歳以上)で優勝することが出来ました。本当に良い仲間と好きなホッケーをPlay出来て、幸せです。

ホッケーこそ私の人生の中心でしょうか!

でも、仕事もちゃんとしていますよ!

σ (^◇^)

HomePage ; (興味のある方はご覧ください!)

(*印は私、新井がHomePage <管理人> を作っています)

●FHMC Tokyo* (新井の東京でのチーム)

http://www.246.ne.jp/~hiroarai/FHMC_Tokyo/

●JGMA : 日本グランドマスターズ協会

<http://www.k5.dion.ne.jp/~jgma-hoc/index.html>

●WGMA 世界グランドマスターズ協会

<http://www.wgma60plusworldhockey.com/12.html>

●Masters PhotoGallery Japan*

http://mastershockeyjapan.web.fc2.com/MastersPhotoGallery/MastersHockey_TopMenu.html

Information

原稿募集

随筆・写真・絵・イラスト 何でも歓迎いたします。

以下の様な仮の題にても原稿をお待ちしています。

- A) お宝拝見 → 秘蔵の一品
- B) 秘伝&私の工夫etc.
- C) うまくなならないGolfの話
- D) 患者さんに教わったこと
- E) 教授こぼれ話
- F) 私の近くのこんな店

等です。どしどしお寄せ下さい。原稿は原稿用紙数枚分(最長10枚)。パソコンで書かれた方は、フロッピーまたはCD-Rも送ってください。顔写真(スナップでも構いません)もお願いします。原稿・写真はE-MAILでも受けつけます。3月までにいただいた原稿は、7月発行の号に掲載いたします。

宛て先

〒236-0021 横浜市金沢区泥亀2-8-12
金沢皮膚科 川口博史

TEL 045(791)5510

FAX 045(791)5514

E-MAIL kanazawa.hifuka@seaple.icc.ne.jp





私の趣味《3》

コーラス

袋 秀平 (ふくろ皮膚科クリニック：横浜市港南区)

「神皮」編集委員会の皆様より、趣味について書くようにとお達しをいただきました。私のクリニックはふくろうをロゴマークにしており、院内にふくろうの置物がたくさんあるので、それについて書くのではないかとか、果ては「往診が趣味なのではないか」とかいう話があったように漏れ承りました。

失礼な。

往診は、きれいではありませんが趣味ではありません（仕事ですっっ！）。

私にもれっきとした趣味があります。それは「コーラス」です。

大学入学後は運動したいとは思っていたのですが、中学の時にバスケットをしていて膝を傷め（オスグット・シュラッテルと半月板損傷）、体育会系のクラブにはいるのもしんどいし、適度にやれるサークルもない（何しろ単科大学でしたので）、どうしようかと考えていたら美しい声の女性から電話がかかってきました。コーラス部への誘いでした。中学・高校と学校の合唱祭があり指揮をしたこともありましたので興味がなかったわけでもなく、御茶ノ水の歯学部講堂での練習に顔を出したのが運のつき、そのまま入部となりました。学生数が少ないので当時付属の看護学校、臨床検査技師学校、歯科衛

生士学校、さらには部員の知り合いの女子大生を助っ人にして何とか成り立っている合唱団でした。私に勧誘の電話をくれたのはその女子大生のお姉さんだったわけです。それでも年1回の単独での定期演奏会と関東大学合唱連盟（関東近郊の5～6大学の連盟で、横浜市立大学も一時期は加盟されていました。当時私は市大の校歌も歌えました。もう歌詞をわすれましたが）の演奏会を目標に、毎週2回の練習と春夏の合宿を行っておりました。プロの指揮者を招いて指導を仰ぐのですが、日々の練習は学生が行います。「学指揮」とよばれる学生指揮者を3年ほどやりました。学指揮は部員に練習をつけなくてはなりません。発声に関する知識もなくてはならないので、近所に住んでいた二期会会員のテノールの歌手の方をお願いして声楽を習ったり、日本合唱センター（今はどうなったか知りませんが当時恵比寿にありました）の指揮の講座にも通って、結構情熱を燃やしておりました。

1960年代後半から70年代前半が部員も多く全盛期だったようですが、私が入学した1979年にはすでに凋落傾向にあり、部員の確保には苦勞しました。メンバーが足りなくて定期演奏会にはOBにステージにのってもらったり（自分がOBになってからのりました）しておりました。大学の合唱界自体も一時ほどの勢いはなくなり、関東大学合唱連盟も以前は新宿文化センターなどの2,000人近く収容できるホールを借りて演奏会を行っていましたが、団体の入れ替わりがあったり、部員数が減ったりして、いまではやや小さいホールで細々と会を続けているようです。

大学卒業後も、大学時代にお世話になったことのある指揮者が立ち上げた合唱団に所属して何度かコンサートにのったり、東京の合唱コンクールで2年連続審査員特別賞と銀賞をいただいたり（金賞だと全国大会に行けたのですが）、渋谷のオーチャードホールで1999年まで行われていたMostly Mozart



30年近く前、大学3年ころの演奏会での写真です。その後の苦勞が髪に出ています

という、モーツァルトの作品だけを演奏する一連のコンサートで、レクイエム（モツレクと言います）を海外のオーケストラと共演する機会を得たりしておりました。

その合唱団を、ある事情で指揮者の先生が離れた

のをきっかけに私も休団し、このところ合唱からは遠ざかっておりましたが、昨年母校のOB会が久々に開かれて集まる機会があり、また歌ってみようかなと考えている今日この頃です。



私の趣味《4》

私の趣味？—精神修養？—

吉田秀也（吉田皮フ科：川崎市宮前区）

趣味に関しての一文をという御依頼に……私の趣味といえるのは、上手下手は別として長年つづいているという点からは射撃しかありません。クレー射撃です。ゴルゴ13のようなスナイパーが使うライフルは使いません。砂粒のような弾（散弾といいます）を火薬で撃ち出し、鳥のかわりにクレーという素焼の皿を割るという単純な競技です。成績は駄目です。大したことがないどころではありません。まさに下手な鉄砲です。のみならず数撃つとよけいに当たらなくなるのが不思議です。しかし日本の皮膚科医中では充分十本の指に入る腕と思います（これを息子に言ったら、大体日本人の皮膚科医という時点で少ないのに、射撃までやるヒマ人は10人もいる訳ないと、鼻で笑われました。—ジョークなのに—）。

愛銃？はイタリアのベレッタ社製682GOLD。口径は12番という銃です。特に銃にこだわりはありません。性能的には高い銃も安い銃も全く同様です。高い銃は一般的には性能というよりも、美術工芸品

的な要素が強いものが多いです。私も同じイタリアのベラッツィーという会社のものが欲しかったのですが、お値段がひと桁違うので買えませんでした（車1台というところ）。ふつうの人が使うのは手元で2つに折れ弾をこめてから撃つ元折れ式上下二連銃と言ひ、上下に2つの銃身がついているので一度に2発まで撃てます。弾は、私のやっているトラップという種目では7½、24gというものを使いますが、詳しく言うと複雑なのでやめておきます（外観は、アンテベートローションの容器と大きさもそっくりです…）。

競技の概略は、5つ横一線に間をあけて並んだ射台という白線で囲まれたバッテリーボックスのようなところに入り、そこで銃に2発の弾を込め、順番が来たら、銃をかまえ、合図の声をかけます。すると、クレーが、10数メートル先の地下壕から左右斜め、あるいは上方へ飛び出し、それを撃ちおとす。終わった次射台へと進みまた撃つ、端にたどりついた



私です。この時ははずしました



私の銃ベレッタ682GOLDと散弾です



標的となる素焼の皿、クレードです

らまた元の位置にもどる。これを25回くり返し、いくつおとしたかを競うのです（これが1ラウンド）。えー、こう書くとまことに単純な競技ですが、いざその段になるとそうそうあたらないのは、話の流れから勘のよい方は察していただけたらと思います。私なんかもう10年になるかというのに、やる度に下手になるような感じです。高得点がとれる人と、とれない人との差は実はあまりありません。テクニックでも反射神経でもなく、メンタルの強さというか、ハートの強い人は高得点をキープできます。あと1つあたれば満点（満射といいます）、優勝という場面で常に平常心の保てる人や気分転換の早い人も上達早いですね。本当のメンタルスポーツです。いまさらながら、メンタルの超弱い私には最も不似合いのスポーツだったのかと愕然とする思いです。標的が固定されている射撃（ライフルです）をやっている友人に、動かないのなら大丈夫そうだからやろうかな。とつぶやくと、動かない方がもっとメンタルに左右されるのだと一喝され、しまった口が



大井射撃場の風景。県内唯一の射撃場です

滑ったと、やめました（本当はライフル始めるとクレ射撃はもっと下手になると言われやめた人ですが）。

クレ射撃を始めたきっかけは、少年時代によく読んでいた『GUN』誌を本屋で偶然みかけ、懐かしさで手に取って見たことから始まります。そこに所持までの具体的な方法がのっていました。しちめんどくさい手続きや講習の受講を経て（何日警察署に通ったかわかりません）やっと銃を手にしたときの感動はひとしおでした（あの頃が嬉しさの頂点だったかも）。その時は夢見た国体出場などは今では笑い話です。しかし、成績に関係なく、撃った瞬間の脳までシビレるような、目のさめるような感じや、クレが粉々に碎け散り視界から去ってゆくのを見たときの爽快感は他には比較できるものではありません。

手続きはめんどくですが、外国であれば比較的かんたんに経験できます。皆さんもぜひ一度体験なさることをお勧めします。

